

「序章/むさし・天城そば」



焼家の大吉組合長



新米刑事·新庄 誠



むさしの真理子



美松の幹夫



一品香の慎ちゃん



賀楽太のかよちゃん



土佐屋のよっちゃん



なみなみのトンチャン



料磨のオサム

連載発行日 <毎月10日・25日更新・全11回>

2017.4.25 👁 序 章 「むさし・天城そば」

2017.5.10 🗗 第1話 「美松寿司・黒船寿司(前編)」

2017.5.25 🚯 第2話 「美松寿司・黒船寿司(後編)」

2017.6.10 🕀 第3話 「一品香・天然塩ラーメン」

2017.6.25 📵 第4話 「賀楽太・おまかせ」

2017.7.10 🗗 第5話 「土佐屋・カクテル龍馬(前編)」

2017.7.25 👁 第6話 「土佐屋・カクテル龍馬(後編)」

2017.8.10 → 第7話 「なみなみ・地金目鯛の串焼き(前編)」

2017.8.25 @ 第8話 「なみなみ・地金目鯛の串焼き(後編)」

2017.9.10 3 第9話 「料磨・鯵のなめろう丼(前編)」

2017.9.25 🗊 最終話 「料磨・鯵のなめろう丼(後編)」

序章「むさし・天城そば」

真理子は、「下田のパパラッチ」とも呼ばれ、夜な夜なネタを求めて町を 下田市内のあらゆる場所に情報網を持つ、うどん・蕎麦『むさし』の

うろつくことで有名である。

そんな彼女の元に「大吉、入院!」の一報が届いた。

に、下田料理飲食店組合・組合長である。 大吉とは澤地大吉、六十九歳。焼肉店『焼家』の主人であると同時大吉とは澤地大吉、六十九歳。焼肉店『焼家』の主人であると同時 組合の理事も務める真理子

を巻いて、痛々しい姿をさらしていた。 は、下田ホスピタルに急行、大吉を見舞うと、彼は頭に血のにじんだ包帯

しかも大吉は、ケガの原因を頑として話そうとしなかった。

るのよ。 行だって。大吉さん、闇討ちにあったのに、犯人を知っているから隠してい 「そこで私はピンときちゃったの。これは絶対、組合内部の人間による犯 病気知らずで頑強なあの人が、入院して、さらに弱ったような顔

をしている。相当に、精神的にもショックだったはず……」 真理子は、新米刑事、新庄誠が座る座敷のふちに腰を下ろして話

込む。

いた。下田一の老舗で、創業一〇一年のこの店の名物「天城そば」は、その 新庄は、茄子の形をした小さなおろし金で、生わさびをせっせとすって

昔から生わさびを使用するのだ。

だった。家族旅行で伊豆・下田を訪れた時、父親が連れてきてくれたの 新庄がこのそばを初めて食べたのは、十年以上前、まだ中学生のころ

である。

もうれしいし、大黒柱が黒光りするような古色蒼然とした店の佇まいも 下田警察署に着任するや、この店に通うようになった。安くて大盛りなの と言えば、『むさし』の「天城そば」と頭にインプットされており、四月に わさび田の風景は、今でも記憶の中に鮮やかに残っている。おかげで下田 天城峠周辺の清涼な空気と、傾斜地に段々畑のように作られた緑の

弱気だったと言うのだ。 たまま話す。それによれば、大吉が、三月の組合総会で、これまでになく 真理子はいつもながらに、ジーンズに赤いトレーナーを着て、エプロンをし よかった。

俺の任期もあと一年だ。来年度以降のことも踏まえて、今年からは、

みんなに頑張ってもらわんといかん。よろしく頼むぞ。

「あの大吉さんにしては考えられないでしょ」

そう言われても、大吉を知らない新庄には、わかりかねることだった。

下田料理飲食店組合は、約百二十店舗の組合員で構成されており、

十二名の理事と、副組合長、組合長がいるという。

「それからよ。組合内部の様子がおかしくなったのは。 次期組合長をめ

ぐって、みんながギスギスし始めたの。一発触発って感じかな。どいつもこい

つも得意の武器を持っているし……」

「エエッ? 武器ですか?」

新庄は思わず、手に持つわさびが、おろし金の上で滑った。

この町は、いまだ西部劇の時代か? いや日本だから江戸時代になる

のか?

真理子は真剣な表情を崩さないで言う。

「『一品香』の慎ちゃんは、中華用の重いお玉を自由自在に扱うし、『料磨』いっぴんこう

のオサム君は木べらをヌンチャクみたいに使える。『土佐屋』のよっちゃんはのオサム君は木べらをヌンチャクみたいに使える。『土佐屋』のよっちゃんは DJだから、マイクをまるでヘビのように使いこなすわ。ある意味ヘビ使い

よね。『美松寿司』の幹夫さんは、菜箸の先を尖らせて、店の裏でダーツ

クダをまくチンピラを、ビール瓶で撃退した武勇伝があるし、『賀楽太』 をやっているのを見たことがある。『なみなみ』のトンチャンは、店に来て

のかよちゃんは、客が喧嘩すると自家製七味唐辛子で目つぶしを食らわ

せるのよ」

そう説明されて、新庄はややホッとした。

武器と言っても調理道具の類いなのだ。

人口二万二千人余の下田の町は、普段は平和そのものである。

季節は五月下旬、先週この町の最大のイベント、アメリカ海軍なども

参加する黒船祭が終了し、下田署内もふたたびゆっくりし始めたところ 唯一、「オレオレ詐欺」が大きな事案で、新庄も、直属の上司、三島警

部補とともに事件を追っていた。

「真理子さん、あんまり変なことを言わないで下さいよ」

箸で蕎麦を持ち上げて、つけ汁につけ、音を立てて一気にすすった。 新庄はつけ汁におろしたわさびを入れ混ぜながら、彼女にくぎを刺す。

「やっぱ、うまいっすね。生わさび。ほのかなツーンがいいですね」

細めの蕎麦は喉越しがいい。なぜか、ビールのあてに出してくれた鴨焼

きをひとつまみする。

「で、大吉さんの様子を見て、わたしは確信したのよ」

「何をです?」

ざる蕎麦を食べながら、新庄は真理子の顔を見た。

おどろおどろしい表情で、しかも小さく笑みを浮かべるところが無気味

であった。

すでに息子たちは東京で独立し、ご主人には先立たれている。近所の

人をパートに雇い、一人で店を切り盛りする彼女の楽しみは、何よりもこ

の町のゴシップなのだ。うどん・蕎麦屋の女主人の顔が、にわかにパパラッ

チのそれになり変わる。

「大吉さんを闇討ちしたのは、組合員にちがいないのよ。きっと誰かが、



ら始まるあじさい祭に出られなければ、その誰かが、組合長代行として指 を発揮できれば、自ずと来年度の新組合長選挙でも、優位に立てるじゃ 先走って組合長になろうとしたんだわ。大吉さんがケガをして、来週か 大吉さんが始めたきんめ祭も並行して行われる。この祭でリーダーシップ 揮を執ることになる。あじさい祭は、下田料飲組合の最大のイベントよ。

なら三人前ある特盛を食べたいところだったが、この日は鴨焼きを出して くれたので、ちょうどいい腹持ちである。 新庄は、一人前はあるざる蕎麦の大盛りをあっさりと平らげた。本来 ない?」

グラスに残ったビールを流し込む。ビールはもうちょっと飲みたいが、

慢する。

「ごちそうさまでした! うまかったっす」

「それで、あなたに相談なのよ」

「いったい、何をです?」

「あなた、新米とはいえ刑事だものね。捜査協力してもらえないかと・・・ 新庄は、顔を近づけてくる真理子から逃れるようにのけぞった。

•

「そんな民間人のいざこざに、警察が首を突っ込むわけにはいかないで

警察には、民事不介入の原則があるのです」

「だけど、大吉さんは闇討ちにあって、頭にケガをした。これを見過ごす

わけにはいかないでしょう?」

「しかしですね。傷害事件とするならば、まずは大吉さんに警察に来て、

事情を話してもらう必要があるのです。警察が、そこで傷害事件と認め

れば正式に捜査されます」

「だけど、あの頑固おやじが、私が聞いても答えないのに、警察相手では

余計何も言わないでしょ。そこで私たちで極秘捜査をして、真相を炙り

だすのよ。 組合内の内紛は、理事の一人として放っておけないの。今の状

態のままだったら、あじさい祭やきんめ祭にも、きっと支障が出るわ。

は出しておかないとね」

ったん真理子は、グラスだけを残して、新庄が食べ終えた容器を手に

厨房に下がった。

ビール瓶を一本手に持って、ふたたび出てくる。

「まあ、いいから一杯飲みなさいよ」

「注文していませんよ」

「いいからさ。栓だって、抜いちゃったんだから」

ビールがグラスに注がれる。

「こんなことを本職の刑事さんに相談させてもらって、悪いなあと思って

いるのよ」

新庄は、真理子の言葉に流されるように、ビールを飲んだ。

新庄がふと見ると、いつの間にか真理子がチェック柄の帽子をかぶって

いた。

ディアストーカー・ハット(鹿撃ち帽)である。イギリスの有名な帽子で、

名探偵シャーロック・ホームズがかぶっていたことから、「シャーロック・ハット」

と呼ばれることもある。

推理小説好きが高じて刑事になった新庄が、知らないはずがなかった。

「どうしちゃったんです、真理子さん?」

「どうもこうもないわよ。これを見てもわからないの?」

「わからないのって、シャーロック・ホームズですか?」

「そのとおりよ、ワトソン君」

「ワトソン君って、ちょ、ちょっと待ってくださいよ。オレオレ詐欺の捜査で

忙しいですし」

「そこを何とか。私だって昼間は忙しいし、 極秘捜査は、夜だけでいいん

だから」

「そんなの上司に知れたら大事ですよ」

週間だけでいいから。ネッ、お願い。助けると思って。だいたいあなた、

今日、タダで鴨焼きを食べたし、ビールだって飲んだじゃん」

「エエッ?・ そんなの……」

新庄はにわかにうろたえた。

目の前に太字で書かれた「汚職」の二文字がちらついた。

告発されたらどうしようもない。

新庄はあたりを見回した。

店内には誰もいなかったはずである。

店の中央、大黒柱の陰から、暗がりに白い煙が立ち上る。

そこに、パイプを手に持つ男の顔が現れた。

「……わし、見たで」

眼鏡をかけたその男は、ニヤリと笑いながら、関西弁で重々しく言った。

「野人よ。下田一の文化人……」

真理子の説明に、新庄はがっくりと頭を垂れて、あきらめた。

文化人の野人とやらに告発されたら、刑事をクビになるかもしれない

のだ。

「こうなったらしょうがない。 手伝いますよ!」

新庄は投げやりに言った。(続く)



この物語はフィクションですが、各店舗、店主、料理は実在します。ぜひ一度お越し下さい。



岡崎大五

岡崎大五プロフィール 1962年愛知県生まれ。作家。

2003年より下田市在住。下田市観光 大使。ベストセラーの『添乗員騒動記』 (角川文庫)をはじめ、下田を舞台にし た『生還の海』(徳間文庫)、『サバーイ・ サバーイ』(講談社)など著作は40冊 以上。

下田の人と自然をこよなく愛する、サーファーでもある。

連載「伊豆下田料理飲食店組合事件簿」はこちらでお求めいただけます。

スマホで読む Dia ¥100



下田 100 事件簿 🔾

※お読みいただくにあたってアカウント登録及びクレジット決済登録が必要です。

冊子で読む [155] ¥200

冊子版の設置場所

焼家/むさし/美松/料磨/一品香/土佐屋/開国厨房なみなみ・なかなか・ぼちぼち・ダイニング NAMINAMI/賀楽太/商工会議所/道の駅 まるごと下田館/村上書店本店・アネックス店・とうきゅう店/セブンイレブン下田柿崎店/地場や/ガーデンヴィラ白浜

定期購読

ご連絡いただければ下田街中・東本郷・西本郷は配達も承ります。 お問い合わせ/ 080-5297-6144 (澤地) ※有料版全10回(2,000円)分前払いとなります。

<協力店>

美松 / 料磨 / 一品香 / 開国厨房なみなみ / 土佐屋 / 賀楽太 / むさし / 焼家

